
さようなら...パパ、ママ。

ラヴェンダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さようなら…パパ、ママ。

【コード】

N0285BA

【作者名】

ラヴェンダー

【あらすじ】

トップモデルの母、優しくて頼もしい父。
優しいボーイフレンドとの初恋。
少女さくらは何不自由なく育ち、幸せに暮らしていた。

だが、彼女はいつも暗い予感を抱いて生きている。
いつか、とても恐ろしいことがわたしたちを襲うのではないかと…。

そしてある日、彼女の愛してやまない父が事故で死んでしまう。
その死によって、さくらの家族はゆっくりと崩壊していく。

やがて、彼女は伯母の家に預けられることになったが……。

↳ 薄幸の少女に降りかかる過酷な運命。

彼女が強い女性となっていく成長を描くダーク・ファンタジー&ロ
マンスです！

1、プロローグ、予感

こんなに幸せでいいのだろうか　、と思うときがある。

それは決まって、不幸な人々を目の当たりにするときだ。

わたしだって悩みの一つや二つ、コンプレックスだってある。

けれど、本当に不幸な人たちに比べると、

わたしのちっぽけな悩みなど比にもならないのだろう。

わたしは近辺で、最も裕福な家に生まれついた。

生まれたときから、わたしに足りないものなんてなかったのかも
れない

いいえ、足りなかったのはむしろ不幸だと言えた。

なぜなら、美しくて気高くてギリシャ神話にでてくる女神のような
母と、

優しくて紳士的で、頼もしい父をもっているということ。

お家はとつても広いし、わたしが大好きなドールが幾体も飾られて
いる。

どの人形もガラスの目に美しい巻き毛、愛らしい顔立ちをしていて、
言葉にできないほど高価であるのを物語っているのだ。

しかし、いくら贅沢な暮らしをして好き勝手に生きていて
も、

わたしはいつも暗い罪悪感を抱いていた。

こうして何不自由ない生活を送っている間も、世界のどこかの誰かが自分の不幸を嘆いているかもしれないのだ。

わたしが聞くだけでゾツとするような恐ろしい不幸に見舞われて

。 飢えに苦しむ子どもたちや、戦争やテロで子供を失い、

がっくりと首をうなだれている母親たちの写真、パンの一切れを家族で分け合い、

ろうそく一本を最後のかけらにいたるまで大切にする、

貧しい人々の暮らしの様子を聞かされたりすると、それがいつでも重くわたしを覆う。

どんなに頭上が輝かしく晴れていたとしても、どんなに幸せを噛みしめているときでも、

灰色の雲がどこからともなくやってきて太陽を隠してしまうのだ。

なぜ彼らが貧しく、わたしが裕福で気ままな暮らしをおくれるのだろうか。

神様は、どうしてわたしをちっとも苦しめようとしなのかな……。

それはわたしの中に眠る永遠の謎であり、

じわじわと広がる恐怖でもあった。

わたしは、つねに暗い予感を背中に感じながら生きてきた。

まさに、崖に囲まれたきらびやかな花畑を歩いているような少女時代を送ってきたのだ……。

いつか足を踏み外して、崖から落ちる日がくるのだと……。

やがて……それは的中することになる。

運命は、ある日突然わたしを、安全で幸せなちいさな花畑から、下へと突き落としたのだった。

さながら千の沈黙を引き連れた、

慈悲なき死に神のように……。

2、母

母はロシア人ハーフのトップモデル。

背が高く、スタイル抜群でブルーの美しい目をしたとびきりの美人だ。

近所の人によれば「モデルか女優になるために生まれてきた女性」なのだという。

ほんとうにそうだと思う。

どんなにプライドの高い女性でも、母を目にすれば抱いていた自信をこてんぱんにされてしまうだろう。

そして男性は、ダークブルーの大きな瞳で見つめられるだけで夢のような感覚に陥る。

母はわたしの誇りだ。

きっと、オードリー・ヘップバーンやグレース・ケリーの娘になったらこんな気分なのかもしれない。

しかし、母は高慢じゃない。

容姿が良い人ほど心が汚かったりする。

けれど、母は容姿におとらず心のきれいな人だった。

誰にでも思いやりを忘れない。忙しい人だけでも、決して愚痴をこぼさない芯の強い人でもある。

正しいことは正しいと信じて、間違っていることを即座に見分けることのできる目の鋭さだってある。

まさに母はすべての人にとって理想の人。
自分になりたいと思う事柄を絵に描いたような人なのだ。

彼女は、神様の愛を一身に受ける女性なのかもしれない。

そうわたしと言ったことがあるが、驚くべきことに母は小さく微笑んで、かぶりを振ったのだ。

「そんなことはないわ」（いつもながらその微笑みにはうつとりとした。）

「私は生まれつきこんな素晴らしい環境にいたわけじゃないのよ。ロシア人の母はあまり日本語が上手じゃなくて、苦労も多かったの。とくに、父が母とトラブルを起こして家を出てしまったからはね…。けれど母と父は駆け落ちしてまで日本に来たから、とても故郷に帰るわけにはいかなかった……。」

だからこそ私はモデルの仕事を選んだのだけだ」

母は悲しそうに目をふせ、続けた。

「私はスカウトされたわけじゃなくて、母を助けるためならと、必死にオーディションを受けたのよ。」

実を言うとね、わたしは教師になりたかったの。子供が好きだったから。でもすぐにあきらめたわ」

3、父

彼女はきつぱりとした口調で言った。

「そのころは家にろくな美容品もなかったから、周りの女の子たちみたいに美しく着飾ることはできなかった。それでもようやく私はモデルとなって、今は素敵な人と可愛い娘をもって素晴らしい日々をおくっている…。」

でも、それはかつての苦渋と忍耐があつたからある幸せなの。

本当の神の愛娘は、私じゃなくてあなたなのよ。

きつとね」

母はにっこりと笑った。

そのときの衝撃は今でも忘れられない。

おかしなわたしは、心のどこかで母が生まれたときから大金持ちのモデルだと

思っていたのかもしれない。

この世に生を受けたときから、もうすでに父がそばにいて、瞬く間に大人になって結婚する……。

不幸などという言葉なんて知らない夢の国のお姫様のように。

だがそれは甘くて愚かしい妄想に過ぎないのだ。

わたしは母の味わった苦しみや辛さをかけらも知らないのだろう。

……本当の神の愛娘は、わたしなのかしら。

もしそうなら、わたしは一生苦勞を知らずに過ごすのだろうか。

いいえ、苦勞をしないことが幸せだと断言できるかしら…。
だって、甘やかされて悩みの一つもない人間なんて、
なんだか薄っぺらくて意味のない存在に思えるもの。

「ただいま、さくら」

「おかえりなさい、パパ」

父はコートをぬぎながらいつもの明るい微笑を浮かべた。

「元気にしていたかい」

「ええ。楽しかったわ。クラスでね……」

わたしがクラスの班対抗レクについて話し出すと、父はコートをハンガーにかけたり、
靴をぬいだりしながら聞き入った。わたしは自分の思いがけない活躍をしゃべりながら、

いつも優しげにきらめく父の目を見つめた。

父は百八十センチ、痩せていても太っていてもいない体格をしている。
とつても若々しくて、エレガントな人だ。とても四十代には見えな

い。
そして誰もが知る大手航空会社の副社長。頭が良く、なんでも知っ

ていてとても頼りになる人である。どうして学者にならなかったの
だろうかと、本気で疑問に思うときがあるくらいだ。

そして……、わたしの一番の理解者でもあった。

「それはすごい」父はうなずきながら笑った。

「僕のサクラのことだから、なんでもできるんだな」

「スポーツは苦手なんだけど」

「そりゃあまあ、おまえは頭がいいからな。そっちのほうに向いているかもしれないな」

「……それでね…将来はさ……」

すると、ダイニングルームの扉から母が首を出した。「あら」

「おかえりも言わずになにをはなしているの」

「やあ、ユリア。今日はめずらしく早いんだね」

母はわざとつつけんどんに答えた。「ちがうわ」

「あなたが“めずらしく”帰ってくる日だから。はやめに仕事を切り上げたの。Kuraraの撮影もあつたけど明日に変更させてもらったんだから」
kuraraは人気ファッション雑誌の一つだ。

「それはすまない」けれど父は満面に微笑を広げた。

わたしと父がダイニングルームに入ると、家政婦の吉川さんがキッチンから顔を上げて暖かく微笑む。

「…旦那さま、おかえりなさい。今日は特別なディナーですよ。なんでも、旦那さまの誕生日ですからね」

わたしはそこで、わざと玄関で言わないでおいた言葉を最大限の笑

顔とともに告げた。

「パパ、47歳の誕生日おめでとう。いつもありがとう」

わたしが父に抱きつくと、父は手をまわしてくれた。父の手は、いっただって温かい。

「ありがとう。お前は本当にいい子だね。両親が忙しくても、ちっともわがママをいわないから」

わたしが照れてうつむくと、母が背後にやってきてわたしの肩に手をおいた。

母の優美な腕からは華々しいライラックの香りがする。

「プレゼントを部屋においておいたから。あとで見て感想を聞かせてね。さあ、早く着替えて、夕食にしましょう。さもないと、さくらのお腹と背中がくっついてしまうわ」

母は魅力的な声で笑い、わたしの肩を軽くたたいた。父も笑いながら階段を上っていく。

わたしは頬をふくらませて席についた。

右手で銀のフォークをにぎって。

実のところ、吉川さんが腕によりをかけた料理の匂いに、とても耐えられそうもなかったのだ。

そしてわたしたちは、何ヶ月かぶりで、家族そろって食事をとった。

それがどれだけ素晴らしいかなんて、きっと誰も想像がつかないだろう。

4、ボーイフレンド

けれど、素晴らしいのは家ばかりじゃない。

学校でも、わたしは気ままに楽しい時間を過ごした。

わたしの学校生活に新たな彩りを加えたのは、やはり清二の存在だろう。

彼は同じ高校一年生。

ボーイフレンドでもある。

容姿端麗、成績優秀の彼はすらつとして背も高い人気者。

彼はいつもにこやかな微笑を浮かべて、他人に優しく、そんな彼の周りにはいつも自然と人が集まっている。まさに人目をひく存在だ。

わたしたちが知り合うきっかけになったのは、放課後の図書室のことだった。

社会のレポートを終わっていないなかったわたしは放課後、図書室に残って最後の総仕上げをしていた。

そのとき、図書室の扉が開き、誰かがわたしを見て声を上げたのだ。

「あっ、ヤッベー。人いるじゃん」

くるくるの天井がわたしを見るとすぐに引っ込んだ。

「ほんと？ いつもこの時間はいないんだけど」

そういつて中をうかがおうとしたのが、あの深見清二。視線がしばらく部屋を泳ぎ、明るげな色をしたその目がわたしをとらえたとき、

わずかに見開かれたのがわかった。

わたしはレポートをかきあつめて、あわてて席を立とうとする。「あ、ごめん。図書委員会でしょ？」

彼らはおかしそうに笑みを浮かべると首を振った。

「ちげーよ、俺の補習に清二がつき合ってくれただけ」

天然パーマの男子がいうと、清二はうなずき、わたしを見つめたままかすかに微笑んだ。「…レポートだろ？ その向こうの席つかってもいいかな。邪魔にならない程度で」

「あ、うん。いいよ」ふいに体が熱くなり、清二の目を見ていられなくなった。

わたしはレポートとペンケースを再び置くと、はやく終わらせるために没頭しようとした。

向こうの席に向かいながらも、深見清二の視線が自分を離れていないのがわかったからだ。

二人はそれから、数学やら英語やらの教科書を取り出して先生と生徒になって補習を始めた。

教えている清二の横顔を見てしまったら、女の子は一撃かもしれない。

レポートをかきながら、わたしは彼の説明のわかりやすさに感心し

ていた。

天パーの男子は問題をすらすらと解けるようになっていそうに笑い声を上げ、わたしが終わって、すぐに終了したようだった。

5、清二

「邪魔じゃなかった？ 篤志がうるさかったろ」

篤志というらしい天然パーマの男子は塾で、補習が終わってすぐに走って帰ってしまったらしい。

わたしと深見清二は帰り道が同じということ、成り行きで帰路をともにしていた。

改めて近くで見ると、深見清二は最初見たときよりもかっこいい。風になびいて横に流れる髪の毛が軽くウエーブしていて、とてもさわやかだった。

彼は首をかしげてバカみたいに見入っているわたしを見た。……
「??」

「あつ、い、いや。ぜんぜん」あわてて我に戻る。

「そうか。あのレポートほんとうにめんどくさいよなあ。
六ページ以上なんてさ」

「もう提出したの？」

「うん。昨日」

透き通ったテノールで答え、彼は微笑を浮かべた。

「あ……そういえば僕のこと知ってるっけ」

「ええ、深見くんていうんでしょ」

「そつだよ」「うなずいた。「意外と知られてるんだな」

「当たり前でしょ」

「どつして」

「言えるわけがあるだろうか？？」

わたしは顔を真っ赤にして前を向いた。彼が戸惑ったような顔をしたのが、視界の隅で見えた。とんだ恥をかいてしまったようだ。

「そつちだって、なんでわたしのこと知ってるの」

「篤志がよく話してるよ」彼が笑った。

「図書室に入ったとき、あいつがうれしそうにしてるのわかっただろ？？」

「わからなかった」名前さえも知らなかった。

「クラスじゃ有名だよ。でも、想像してたよりお高くとまってないんだね」

「もちろん。お高くとまったことなんて一度だってないもの」

「そつみたいだね。篤志にも希望はあるのかも。」

じゃあ、また。あそこ曲がれば家だから」

「あ、そうなの」希望???

彼はかすかに微笑んでからいった。

「レポート頑張れ」

わたしがうなずくと、彼はすぐに角を曲がっていった。

わたしはしばらく身体が中に浮くような気分になり、あやうくよるめいて倒れるところだった。

自分の頬をつねり、夢じゃないことを確かめてみる。

うれしい夢を見ると、目覚めてしまったとき、がっくりしてしまう……。

でも、これは夢じゃない。

なんたって、あの深見清二と帰ったのだ！

誰が信じてくれるだろう？

5、清二(後書き)

書き貯めしておいたので、今は更新早いです。
そそっかしくてすみません！

6、幸せ

それから、わたしと清二の距離は急速に近くなっていった。最初こそはお互い遠慮してあいさつを交わす程度だったが、放課後に時間があれば清二が話しかけてくれるようにもなり、いつも一緒に帰る友達に断つて、週に一度は帰路をともしるようになった。

一緒にいて、こんなに楽しい気分になれる男の子は今までいなかった。

彼と話すと、心が満たされていくのが身にしみてわかる。わたしが思っていたよりもずっと、彼は才能に恵まれていて、できないことはないと言っても過言ではなかった。なおかつ性格がとても温厚だった。

わたしたちのことはもう誰でも知っていた。

親友の美緒はとてもお似合いだとほめてくれさえする。

「悔しいくらいよ。だって、深見清二とさくらよ!」

そのことを彼に話し、どれだけ幸せか話すと彼はいつもの優しい笑みを浮かべた。

「僕こそ、さくらと仲良くなれたのが夢みたいだよ。君と出会って、毎日が楽しいしね」

「ほんと?」

「ほんとに決まってるだろ」

わたしは彼と並んで帰りながらうなずいた。

「うれしい。意外と清二って恥ずかしがらないんだね」

彼は顔を赤くした。「だって、ほんとうだぜ」

「うん。信じるよー」

「その顔信じてない」

「えー、そうかなー」

しばらく間をおいてから、わたしはにっこりと笑った。

「わたしも同じ。ねえ、今度どこかに遊びに行こうよ」

「……………いいね。そうだな……………東京でも、いく？」

「いこー！ もうずっと行ってないもの」

「そうだな……………。渋谷でも行ってみようか」

彼が宙を見ながら言った。わたしはうれしさで胸がはちきれそうになる。

そして、これから何があっても、清二は絶対に離さないと固く誓った。

彼を失うくらいなら、死んでしまってもいいほどに。

7、悲しみの予兆

しかし、わたしの幸せは永遠に続くわけではなかった。

ある日突然、それは起こったのだ。そして、わたしの運命も大きく変わった。

今でもその日のことを思い出すと涙がこぼれそうになる。

あまりにも急すぎて、深い悲しみに母とわたしの心は耐えきれなかったのだ。

わたしと母が流した心の血と涙は、大海ほどにもなるだろう。

心も体も傷つき、癒えることなど絶対に不可能だろうとも思った。

死んでしまいたいとも思った。

幸せそうに暮らしている友達を見て、憎いとさえ思った。

もしそうなる運命だったのならば、せめて悪魔でも死神でも良かった。

わたしに予言をし、覚悟する時間を与えてくれたなら……。

そう。まるで神様のわたしたちの家族に対する愛が、ふいにプツンと切れてしまったみたいだった。

その日は朝から機嫌がよかった。

今日は父と夕食をともにできる特別な日。そして次の日の土曜日は清一と一緒に東京に遊びに行く予定だ。

なにもかもが、わたしには光輝き、自分に幸福をもたらしてくれるものなのだと思ってしまっただった。

登校中のわたしの足はいつも以上に弾んでいた。父は家を出ていく前に、振り返って微笑んだのだ。

「早めに帰ってくるよ。待っててな」

わたしは一分でも早く帰ってきてね、とウインクして見送ってきた。最高の日にふさわしい朝だろう。

こんなに素晴らしい日なんてありっこない。

学校から飛ぶようにして帰り、久しぶりに会える父のためにおめかしをすることにする。

いつものジーンズをはいてもつまらない。

きっと明日の朝も今のように奮闘するだろうと思うと、独りで笑みがこぼれた。

青くて清楚なワンピースを着て髪をうしろにまとめたところで、玄関のチャイムが鳴り、母が帰ってきた。「あら」

「きれいじゃない。ちょっと待って」

母はわたしを見るなり機嫌よくうなずき、自分の部屋にかけていた。戻ってきたとき、彼女の白い手には真珠のネックレスが輝いていた。

「これをつけるといいわ」

わたしは驚いて目を見開く。

「いいの？ こんな高価なもの」

「んー。たしかに質がいい真珠だわ。でも夕食だけつけるなら問題はないもの」

母は素早い手つきでわたしにネックレスをつけると、一步下がって満足げにうなずいた。「いいわ」

「とつてもすてき」

「ありがとう、ママ」

「夕食の準備ができましたよ。旦那さまがお帰りになる予定のところですので」吉川さんが戸口から顔を出すと同時に、わたしを見て微笑を浮かべた。

「まあ！ お嬢さん、おきれいですよ」

「ありがとう」わたしもにっこりと微笑んだ。

あとは父の帰りを待つだけだった。

わたしと母は軽やかな足取りで階段を下りていった。

「夕ご飯はなんだろー」わたしがうきうきしながら尋ねると、母はつややかな髪をなでつけながら笑い声を上げた。

「聡の好きなシチューですって。デザートもあるし」

「デザート？ ママ食べてもいいの？ いつも食べないのに」

「今日は解禁日。それに、一日食べただけじゃ太らないと思うわ。

さくら、まさか私が食べられないと思って独り占めしようと思って

たんじやないの？」

「そんなことないよ」

わたしは平静を装った。

それから三十分。

父が帰るといった時刻の七時を多少過ぎたが、吉川さんが料理をラップにつつんでいたので、特に問題もない。

お腹がすいたけれど父との夕食を想像すると少しも苦にならない。わたしたちはバラエティー番組を見ながら気長に待っていた。

ところが八時近くになると、風が強くなりだし、雨も降り始めた。天気予報によると八時から深夜にかけて天気が悪くなるという。見ると、関東に低気圧が集中している。

母がしだいに落ち着きを失い始めた。「おそいわ。大丈夫かしら」わたしは内心の動揺をおさえながら返した。

「きつと混雑してるか、天気が悪いから別の道で帰っているのかもしれないわ。今頃運転手さんと談笑してると思うよ。すぐ帰ってくるわ」

「それならいいんだけど」母は両手をにぎって繰り返した。

「それならいいんだけど……」

8、不安

しかし、八時を過ぎても父は帰ってこなかった。

こんなに遅くなるなら連絡をしてもいいはずだ。

外はますます荒れだし、わたしたちは切り詰める緊張の中、チャイムが鳴るのを待ち続けた。

こぶしを、爪が食い込むくらい握りしめているのに気づく。

わたしはテーブルに目をやった。

すでに料理は冷めてかわき、パサパサとしている。

仕方なく、サラダとシチューを食べることになった。

その間、誰一人としてしゃべる者はなく、

重苦しい空気を打開するのはとても無理に思えた　父が連絡をよ

こす以外には。

母が持つスプーンはぶるぶると震えて、

ちゃんと見ていないとまるで幼児のようにこぼしてしまいそうだ。

吉川さんが気を遣ってほかの料理をオーブンに入れてくれたが、それもやがて冷めた。

そのうち、彼女は帰る時間になってしまい、落ち込むわたしたちを励ますようにいつてくれた。

「そのうち帰ってこられますよ。無理はしてはいけませんよ」
彼女が住み込みだったら良かったのにな……と想着てしまう。
わたしと母だけなんて、あまりにも心細い。

父を心配して食欲はすっかり失せた。

母は明日早いのもう寝る準備をしはじめ、わたしもそれを手伝った。

母の美しい顔はいつのまにか白くなり、しょっちゅう玄関に行ってはドアノブを見つめるのを繰り返した。

あと数分で九時になるといふとき、ふいにリビングの電話がけたたましく鳴った。

わたしは待つてましたとばかりに飛びつき、大声を上げた。

心臓がドラムのごとく鳴り出す。「はい！ もしもし」

母がネグリジエのまま部屋に飛び込み、期待に満ちた顔でわたしを見つめた。

わたしは微笑み、そして父のいつもの明るい声を待った。

しかし、返ってきたのは遅くなった謝罪ではなく、知らない男の人の声だった。

「白城聡さんのお宅でしょうか」

頭にピンと何かが走る。

声は低く、探るような雰囲気を感じていた。

9、恐怖

わたしは胸に広がる不安をおさえてうなずく。「…そうですが…」

男性はしばらく黙り込み、言いにくそうに続けた。

「……私は警察の者です。お母さまはいらっしゃいますか」

「はい。います…」

わたしは母を振り返った。彼女はさっきの期待の色を失って、たちつくしている。わたしの顔もそうかもしれない。「どうしたの？ 誰なの？」母の声はかすかな狂気さえ感じられた。

「…警察の人だって…。ママにかわかって…」

母はそれを聞くなりわたしから受話器を取り上げて声を荒げた。

「はい、白城ユリアです」

それから数分は地獄そのものだった……。

わたしは母がうなずくたび、白かった顔がしだいに青ざめていくのを戦慄にかられながら見守り、心のなかでむっくりと起きあがる不気味な予感に恐れをなしていた。

こんなに落ち着かない気分は初めてだ。パパに何が起こったのだらう？

絶対にいいことじゃない。

そんなことは相手が名乗った瞬間からわかっていた。

母は数分の間押し黙り、やがて首をがっくりとうなだれて答えた。肩が激しく震えている。首筋は色が全くない。

「……………はい。すぐ行きます。」

たしかに、夫なのですね？」

彼女は相手の返答を聞き、受話器を置いたと同時にその場に崩れ落ちた。

わたしはあわてて彼女を助け起こし、彼女に目で事の説明を求めようとした。

が、その顔を見たときたん背筋を冷たいものが走った。

母の顔は絶望に塗り尽くされている。さながら死に顔のようで、わたしはぞっとした。

唇は青く、身体は震えている。

わたしの恐怖は頂点に達しようとしていた。気が狂わんばかりだ。

「ママ！ いったい…」

母はやっとの思いで壁によりかかると、何かが切れたかのようにわっと泣き出した。その姿にはいつも毅然と背筋をのばしている女神の威厳など欠片もなく、強さという強さを打ち砕かれた少女のようだった。わたしは反射的に母を抱きしめた。「……………聴が…」

「ああ……………どうしてこんなことに」

わたしは確信した。

父になにかあったのだ。

……
いますぐには家に帰られない、大きな不幸が

10、死

それからしばらくして、落ち着きを取り戻した母は、やっと父の身になにが起きたかをとぎれとぎれに話し始めた。

「黙って聞きなさい、さくら……………高速で…事故があったようなの。とても大きな…」

パパは……………それに巻き込まれて……………運転手さんは……………」

母は両手に顔をうずめた。

「即死だったの……………。車体から投げ出されて…。それで、車が炎上して……………パパは……………パパは……………」

わたしは息を飲んだ。目尻がじわじわと熱くなるが、無理に微笑む……………。

大丈夫よ。大丈夫……………。

パパだけは大丈夫だから……………。

あんなに優しくして強いパパが死ぬわけがない。

父の死を願う人など、この世には一人もないもの……………。いるわけがない。

母は一言を発するのに数分を要した。

わたしはじっと待った。数分が、まるで数時間のように思える。

ピンと張りつめる沈黙を破ったのは、母の吐息だった。

「パパは……………たった今息を引き取ったって……………」

母の壮絶な一言と同時に頭の中が真っ白になる。
心臓を鋭い剣でつらぬかれたような感覚。

外で雷鳴がつんざいた。

家のなかで、恐ろしい光に照らし出される。まるで世界の終わりのようだ。

ううん……、終わってしまったばいと思っ。

「……ママ？　ウソでしょ。パパが死ぬわけないじゃない」

母は懇願するような目で反狂乱のわたしを見上げた。

「ウソじゃないわ……。もうパパはいないの。遺体が近くの病院に輸送されたそうだから……。確かめにいかない」と

「待ってママ」立ち上がりかけた母にすがりついた。

「パパじゃないわ。その人はパパに似たひとよ。だって……パパが死ぬ理由なんてないじゃない。あんなにいい人だったのよ　あんなに」

涙があふれる。

うわべだけは父の死を否定しているが、もう父が世界中どこを探してもいないのがわかっていた。
だが、信じたくない。

父が　死んだなんて……。

たとえ百万回言われたとしても信じたくなかった。

嘘だよな　　パパが、死ぬわけないよね……？

わたしは心の中で悲鳴を上げた。

母はぎゅっと目をつむり、天井を仰ぐ。

「行ってくるわ。さくら。パパはいい人に間違いないけれど……。けれど……もういない。車の特徴だって、彼のものに違いはないわ。」

わたしは自制を失って叫んだ。

「なんでよ！　　どうしてそんなに冷静でいられるの！？」

ママはパパを愛していなかったの？　　パパは生きてるわ。

今すぐに扉が開いてパパが帰ってくるはずよ！！

死ぬはずないじゃない！」

11、悪夢

瞬間、強烈な平手打ちが飛んできてわたしは床に転がった。

頬をさすりながら目を見開く。頬はずきずきと痛み、燃え盛る炎のように熱かった。

体中の細胞に火がつき、それぞれが凶暴な獣のように叫んでいる。

一瞬なにが起きたかわからなかったが、母が憎々しげにわたしを見下ろしているのに気づき、

背筋が凍った。

「私が冷静にみえる！？ よく見なさいよ！

これがいつもモデルをやっている女性にみえる？ お父さんは帰ってこないの！ もういないのよ」

母の金切り声は野生の動物のそれに似ていた。

わたしはかつてない戦慄に身を震わせた。

母はまるで氷の女王のように冷えた目をしていて、血も涙もない女性に見えた。

絵本で見る魔女そのものだ！　これが今まで誇りにしてきた、優しくて美しい母？

わたしは信じられない思いで痛む頬をさすった。

ママ　？　こんな人、ママなんかじゃない。

母はきつと目を開いてわたしをにらみつけると、部屋を出ていった。わたしはたった一人、まるで幽霊屋敷のように化した家に絶望ともに取り残された。

*

わたしと父が再会したのは、父が小さな箱になってしまっただからだ。つた。

遺体はあちこちに損傷が見られて、わたしにはとても見せられなかったのだという。

その判断は正しかった。

わたしはお骨の前ですら、正気を保つのがやっとだったのだから。

わたしは式場で人目もかばからず何時間も泣き続けた。

葬式にやってきた人の顔など、一つも覚えていない。

慰めにやってきてくれた人もいたかもしれないけれど、顔も上げられなかった。

葬式でなにをしたのかも。

父のことをろくに知らぬお坊さんが、長いお経を上げたことくらいしか……

あの夜以降の記憶はないに等しかった。

母はわたしの前では涙は見せなかったが、彼女の心がいつも涙でぬれているのは知っていた。

彼女の悲嘆に暮れた顔が、それを痛いほど物語っていた。

「お父さんよ、さくら」

母はお骨を抱きかかえて言った。

わたしは父をぼんやりと眺め、虚脱感が身体をおおっていくのを感じていた。

体中の血が抜けていくようだった。

どうせなら、このまま死ねばいい。

ああ、パパ……　　こんな姿になるなんて　　。

あの朝、出かけていくときに微笑んだ父の顔が思い出される。

笑うと、いつも口元にえくぼが浮かび、父の優しさをありありと表していた。

父が笑うとき、わたしも笑っていた。

普段気丈でできぱきとしている母も、モデルという仮面をはずしてよく心から笑ったものだ。

家族の幸せの源だった父が、今はもういない　　力のない肩に、重い現実がのしかかる。

そしてその夜、わたしは人生で一番泣いた。

事故に遭って父が死んだと知らされた日なんて比べものにならないくらいに、手で頬をこすって真っ赤になるほど。

お骨を見て、父が死んだことを受け入れなくてはならないことを悟

ったのだ。

父はわたしにたくさんの思い出を残して去った。

一つ一つ思い出すたび、どれだけそれらが大切で何よりも価値のあるものだったのだと思い知り、

わたしは記憶のカケラをできるだけかき集めて心にロックしておく
と誓った。

絶対に忘れなくなかったからだ。

しかし、記憶は無情だった。

12、励ましと影

父が亡くなってから、数ヶ月で少しずつ思い出は揺らいでいったのだ。

清二をはじめ多くの人がわたしを励ましてくれ、痛みは少しずつやわらいでいった。

だが同時に、あんなにも忘れないと堅く誓った父の思い出、父の笑顔がぼんやりとしか思い出せなくなってしまった。

もう二度と父と夕食をとることができないのに。

もう二度と父と笑みを交わすことができないのに。

結婚式の晴れ姿も、見せることができないのに。

何もやる気が起きなかった。どうして生きているのだろうかとさえ思う。

父がこんなわたしを喜ぶはずなのに、どうしようもなかった。

わたしはなんと薄情なのだろう。

「パパはきつとわたしを嫌いになってるわ」

わたしは清二につぶやいた。

父はきつと天国で悲しんでいるにちがいない。そしてわたしに失望しているだろう。

そう思うと、せっかく縫い合わされようとしていた傷がまた開いてしまうのだった。

傷は永遠に治らない。わたしの夢も消えていく。

だが清二はゆっくりとかぶりを振った。

「失ったものを永遠にとどめておくことはできないんだよ。みんないつかは死んでしまうんだ。

変わらないものなんて僕はないと思ってるよ。

お父さんはきつと我慢強い君のことを誇りに思ってるはずだ。だって、こんなに頑張ってるんだから」

「ありがとう、清二」わたしは涙をぬぐいながらうなずいた。「そうならいいのに」

「本当にそうなら……」

「そうだよ」清二が確信したように答えた。

「心配しなくていい。まずは自分のことを優先しなくてはね」

わたしは微笑んだ。

このときほど、清二の存在のありがたみを感じたことはなかった。彼はまさにわたしの光なのだ。

だが家に帰ると、そんなかすかな幸せさえも消え失せた。

玄関に入ると、父のことを思い出すのはもちろん、変わり果てた母のことを思い出すからだった。

母はあれから何もしようとしなくなった。

私室に閉じこもり、ロッキングチェアにすわって、じつと窓の外を見るようになった。

ピアノもひかず、刺繍もせず、雑誌を見ることもロマンス本を読むこともない。

ただ青空を見ては、深いため息をつくようになった。

あんなに上手で好きだった化粧すらしない。

かつては口紅や頬紅をつけていない自分を人に見せることは絶対になかったのに、

弔問客がやってきても、知人がやってきても、相手の顔を見ることもせず、ただじっとしていた。

髪はボサボサ、かつての輝きを失って、枝毛だらけになっている。母の髪は、どんなにわたしがとかしても、からまりがすごくつまっすぐにならない。

やがては母はそれすらもいやがるようになった。

わたしがクシに手をのばすと、顔をしかめて遮るのだった。

13、母の病気

有給で仕事にはいっていないが、それが永遠に続くわけがない。それでも、母はすべての意欲をなくしてしまった。

「ママ」

わたしは着替えると、すぐに母の部屋に立ち寄った。

「いる？」

返事はなかった。が、驚くべきことに母が化粧台のまえにすわって、アイライナーをひいている光景が目に入ると、驚きで言葉を失った。髪もさらさらして、光沢を放っている。

母はゆっくりと振り返ると、まるで何事もなかったかのように笑った。「あら」

「お帰り。早かったのね。もうすぐお父さんと夕食だからあなたもおめかししなくてはね」

わたしはちよっぴりがっかりしたが、母がまた化粧をやるようになって安心した。

ただ、現実を受け入れられないだけなのだろう。

「もう、ママったら。冗談はやめたほうがいいよ。それに夕食はまださきよ。パパがいたときみたいに振る舞いたいのはわかるけど…」

ママはわたしを見てぽかんとした。

いったい、この娘はなにをいつているのだろうとでも言いたげな表情だ。「ママ??」

母ははっとしたように表情を変え、笑いだした。

「あらら、ごめんなさい。あなたに言うのを忘れていたわ。今日はお父さんがめずらしく早く帰ってくる日だから、一緒に夕食を食べられるのよ。私も撮影があっただけど、あとまわしよ」

そして化粧台に顔を向け、口紅を塗りだした。

「ほんとにごめんなさいね。すっかり伝えるのを忘れていたの。でも偶然早く帰ってきて良かったわ。さあ、私化粧をしなきゃならないからあとでね」

ぽかんとするのはわたしの番だった。

こんな悪趣味な冗談があるだろうか？

わたしは苦笑しながら近づく。

「ママ……。気持ちはわかるけど……」

母はかぶりを振った。「集中させて。集中しないと、ちゃんとできないのよ。久しぶりの一家団欒だから、美しくならないとね」

ゆっくりと微笑を浮かべ、自分の美しい顔に見入っている。

「私は彼と結婚してからずっと変わってないわ。

あなたを生んでスタイルが崩れるかと思ったんだけど、そんなこともなかったしね。

美しいというのは生きるといふのと同じことなのよ。醜かったら、生きていてもつまらないでしょ?」

そういつて笑い声を上げる。

やがて母は独り言を始めてしまったので、わたしは妙な感覚に陥りながら彼女の部屋を出た。

母の様子を訴えるべく、キッチンへ行って吉川さんと話した。「ママがおかしいの」

「最初は冗談だと思ったんだけど……。あまりにも真面目にいうものだから……。だって、パパはいないのに」

また目尻が熱くなる。

吉川さんは深く考え込み、顎に手をあててうなずいた。

「ええ。私も思っていました。だって、今朝からずっと化粧台の前にいるんですよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0285ba/>

さようなら...パパ、ママ。

2012年1月14日10時50分発行